



日本ではなじみの薄い「アドミニストレーション」という職務。社員が働きやすい環境をつくり上げるといふ、組織にとって重要な役割を担うこの仕事には、ファシリテイスマネージャーであり、セクレタリーであり、さらにはウェブマスターであるという、様々な資質が求められる。不動産投資顧問という新たな業態、しかも米国のビジネススタイルで運営される先進の企業で、快適なビジネス環境の構築を担う一人の女性ワーカー。そんな彼女の仕事観をクローズアップする。

女性とオフィスと仕事を考える

# Close-UP

クローズアップ

## セクレタリーから アドミニストレーションへ

米国投資家のファンドを日本国内の不動産に投資し、そして資産運用業務を行う(株)ダヴィンチ・アドバイザーズ。現在、日本の不動

産市場は激変しつつあり、不動産投資に対する注目度は高まる一方。それに伴い、同社も著しい成長を見せている。1998年の設立時には、アメリカ人二人、日本人二人という4名の小所帯であったものが、年を追うごとに体制づくり

が進み、現在では約20名の組織へと成長。今回ご登場いただいた宇都宮美貴さんは、この設立時の4名のうちの一人。企業の起ち上げから、これまでの成長過程を、つぶさに見てきたといえる。

「設立時のスタッフであるアメリカ人は、二人とも日本語が全く話せず、当時は、彼らのアシスタント役をこなすので精一杯といった感じでした。その後、オフィスが六本木から新宿御苑、そしてこの東日本橋へと移転し、それに併せて組織体制も拡充されていった

のですが、今の私の仕事であるアドミニストレーションとしての業務も、そのつど広範囲になっていきましたね。

直訳すれば「管理、経営」。日本企業でいえば「総務」に相当するであろうこのアドミニストレーションという仕事だが、具体的には、一体どのような業務を行っているのだろう。

「まだ4名体制だった当時、日本人スタッフの二人が“とりあえず”として考えた肩書きが、“セクレタリー”と“アシスタント”という業務を文字通りに示すものでした。その後、各自の業務が広がり、数字に強い女性が“アカウンタント（経理）”となり、相変わらず細かい仕事に追われている私が“アドミニストレーション”に落ち着いたのです（笑）。

「雑務が多くて」という台詞とは裏腹に、彼女の担当する業務一覧表には、ファシリティマネジメントからIT関連業務、社長秘書としての機能から対外窓口と、まさに企業が企業として機能するのに必要な業務のオンパレード。とても「雑務」などと一言で言えるものではない。なかでも特に目を引くのが「快適なオフィス住環境を維持するための一切の業務」という項目である。

### 次に何が必要なのかを 的確に見極める“プロの目”

「当社のように若く、日々変化している企業にとって、社員全員が円滑に仕事ができる環境を整えるということは、思っている以上に大変で、かつ重要なことだと考えています。オフィス移転も3年間に3回と、通常の企業では考えられないペースですし、即戦力となるメンバーも次々と入社し、組織変更も頻繁に実施されます。そんななか、すべての社員が効率よく、



株式会社  
ダヴィンチ・アドバイザーズ

アドミニストレーション

宇都宮 美貴 さん

気持ちよく執務できる環境を構築することが、必要不可欠になってくるのです」。

現在は、東日本橋の新たなオフィスづくりも一息ついて、今まで手薄であったIT環境の整備に関連した業務の比重が増えてくるだろうと語る彼女。それというのも、今まで社内にIT担当者を置かず、すべてをアウトソーシングしてきたため、トラブル時の対応が遅れるなど、業務上、不都合な点が出始めているからだと言う。今の会社に何が不足しているか、社員が何に不満を感じているかを的確に見極める目。加えて、「私自身の勉強と、社内外の調整などで、IT環境の構築には半年ぐらいかかると思います」と、まず施策や期限を明らかにするあたりに“プロフェッショナル”としての彼女の資質がうかがわれる。

### 二つの国の良いところを 併せ持つ企業に

そんな彼女にとって、“快適なビジネス環境”とはどういったものなのだろうか。

「海外に住んでいる日本人にあり

がちなのですが、住んでいる国と日本、それぞれの悪いところばかりを都合よく使い分けて、楽をする、だらしなくする、といったことがよく見られます。これは会社組織にも言えることで、例えば、外資系だからと言って必要以上にアグレッシブな態度が現れたり、かと思うと日本の大企業に見られるような官僚的な一面が強調されたりと、複数の国の人々が一緒に働く上での難しさがあると思います。当社は日本法人ですが、企業運営や経営方針は完全に外資系企業ですし、しかも、まだまだ体制が整っていないことから、時によってアメリカの比重が高くなったり、日本の比重が高くなったりしています。しかし、どんな時でも、両国の悪いところではなく、良い面を併せ持った企業でありたいですね。そして、自分自身や社員全員が一番気持ちの良い状態で仕事をしていけたらと思っています。幸いにして当社は、印鑑や書類で縛られるといったこともありませんし、かといってフランクすぎるというわけでもなく、良い意味で全員が融通を利かせながら仕事をしているといえます。このような状態を、さらに大きな組織になっても維持していきたいと思っています。また、それがアドミニストレーションの、最も重要な役目なのではないでしょうか。

一般に外資系企業というと、どうしてもビジネスライクでドライなイメージが思い浮かぶ。しかし彼女の理想は、「社員全員が調和して、気持ちよく仕事がしたい」ということだ。様々な価値観を持つ人が集まり共同作業を行う外資系企業で、ハード面とソフト面との双方から、そのビジネス環境を整えるアドミニストレーションには、実は、彼女のような“人材”こそ、必要不可欠なのだといえるのだろう。